

小学校音楽科における民俗音楽教材化の史的課題

ーハンガリーの現在を参照してー

権藤 敦子¹, 高橋美智子², Fügedi János³

要約

日本の音楽教育はこれまで海外の音楽教育思潮に学びながら展開されてきた。なかでも、ハンガリーでコダーイ・ゾルターンが提唱した音楽教育は、半世紀にわたり現在まで日本の教育実践に大きな影響を与えてきている。しかしながら、ハンガリーの音楽教育の日本へのアダプテーションが社会的・文化的な背景を十分に考慮してなされてきたとはいえない。一方で国際的にコダーイ・コンセプトが広く受け入れられながら、他方で深く自国の民俗音楽を探究しているハンガリーの現在を参照することによって、日本の小学校における音楽科教育と民俗音楽研究との接点を再考する。

キーワード：ハンガリー，日本，民俗音楽研究，小学校音楽科

1. はじめに

2013年7月29日から8月2日にかけて、ハンガリーのケチケメトにおいて第21回国際コダーイ・シンポジウム（International Kodály symposium）が開催された。筆者はケチケメトでのシンポジウムに参加するとともに、ブダペストにあるハンガリー科学アカデミー人文科学研究センター音楽学研究所（MTA BTK 音楽学研究所）を中心に、ハンガリー国内の民俗音楽、民俗舞踊に関する研究について情報提供を受ける機会を得た。

小論は主として今年度の海外調査にもとづいて執筆を行う。論考中、6. コダーイの音楽教育理念における民俗音楽の意義と必要性については、ブダペストの Ars et Musica 総合芸術研究所を主宰する高橋美智子が分担執筆し、5. ハンガリーにおける民俗音楽研究に関しては、ハンガリー科学アカデミー人文科学研究センター音楽学研究所の資料の高橋による抄訳と、同研究所ハンガリー民俗ダンス研究部主任であるフゲディ・ヤーノシュの執筆による。

2. 日本における民俗音楽教材化の現状

2008年に告示された小学校学習指導要領音楽編では、歌唱の活動では「それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など」、鑑賞の活動では「我が国の音楽の特徴を感じとりやすい和楽器に

¹ 広島大学大学院教育学研究科

² Ars et Musica 総合芸術研究所（ブダペスト）

³ ハンガリー科学アカデミー人文科学研究センター音楽学研究所（ブダペスト）

よる音楽」が教材として提示され、解説によれば「箏曲、和太鼓の音楽など和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、わらべうた、民謡、祭り囃子など生活している地域で親しまれている音楽」（文部科学省 2008a : p.48）、「和楽器による音楽、雅楽、歌舞伎、狂言、文楽の一場面などを含め多くの人々に親しまれている我が国の音楽」（文部科学省 2008a : p.64）といった伝統音楽を教材として選択し、その指導を一層充実するよう求められた。また、中学校では、歌唱教材には「民謡、長唄など我が国の伝統的な歌唱のうち、地域や学校、生徒の実態を考慮して、伝統的な声の特徴を感じとれるもの」（文部科学省 2008b : p.34）を含めることとされ、伝統的な歌唱とは、「仕事歌や盆踊歌などの民謡、歌舞伎における長唄、能楽における謡曲、文楽における義太夫節、三味線や箏などの楽器を伴う地歌・箏曲など」を指す（文部科学省 2008b:p.38）。高等学校の学習指導要領解説では、中学校で示された、「雅楽、能楽、琵琶楽、歌舞伎音楽、箏曲、三味線音楽、尺八音楽などや、各地域に伝承されている民謡や民俗芸能」に声明を加えて、「我が国や郷土の伝統音楽の種類」の例としている。これは、2008年1月の中央教育審議会答申において、「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着を持つとともに他国の音楽文化を尊重する態度を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする」ことが小学校、中学校および高等学校を通じる音楽科の改善の基本方針とされたことによる（文部科学省 2008a : p.3）。

改訂された学習指導要領では、これらの音楽についても西洋音楽と同様に、音や音楽を知覚し、音楽を形づくっている要素や構成に着目して、よさや美しさなどを味わうようにすることが学習方法として示された。他方で、中学校では目標に「音楽文化についての理解を深め」という一節が加えられ、高等学校の学習指導要領解説には、我が国や郷土の伝統音楽がそれぞれ固有の特徴をもつこと、「種類や特徴を網羅的に扱うのではなく、地域や学校の実態等を十分に考慮して教材を準備し、我が国や郷土の伝統音楽の特徴を感じ取り、理解するとともに、その理解が創造的な鑑賞に結びつくようにすることが大切である」とされたのである（文部科学省 2009 : p.29）。

ここには、二つの大きな問題が潜んでいる。まず第一に、これらの音楽は、「我が国や郷土の伝統音楽」という一括りの扱いをすることのできない性格のものである、という点である。いずれも、明治期以前から継承されてきたという点では時間的に長く日本に存在してきた種目であるが、たとえば、古典的な伝統音楽・芸能として伝えられてきた雅楽、能楽を授業で取り上げる場合と、それぞれの地域で人々に歌い変えられ、流行し、伝播していった民謡やわらべうた等民俗音楽を扱う場合とでは、その教材性は全く異なる。第二に、「音楽を形づくっている要素や構成に着目して、よさや美しさなどを味わう」ことは、一つの作品、楽曲をその教材として想定してきた従来の音楽教育には有効であるとしても、人々の生活とともにあり、その時々に変化し、つくりかえられていく民俗音楽を捉える際には、必ずしも「音楽を形づくっている要素や構成に着目」してその音楽を理解したり、「美しさ」を価値基準として批評したりすることが適切な学習過程であるとはいえない、という点である。

中学校で「音楽文化についての理解」が求められ、高等学校で「種類や特徴を網羅的に扱うのではなく、地域や学校の実態等を十分に考慮」することが解説に示されながら、小学校では、「長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など」が一括りに「世代を超えて受け継がれてきた我が国の音楽文化」と示されている。こうしたわらべうたや民謡、民俗芸能の扱いを見る限りでは、民俗音楽独自の特質への顧慮は感じられない。

3. 民俗音楽の特質と音楽教育

民俗音楽と音楽教育とのかかわりは、国楽が模索され始める明治初年にさかのぼる。「終ニハ貴賤ニ関ハラズ又雅俗ノ別ナク誰ニテモ何レノ節ニテモ日本ノ国民トシテ歌フベキ国歌奏ツベキ国調」、すなわち、国楽を興すことの必要性が1878年の目賀田種太郎の上申書に書かれている（塚原2009：p.108）。そこでは、日本の伝統音楽を古典的な能楽・箏曲や琵琶歌、浄瑠璃・長唄、小唄俗曲の三つのクラスに分類し、第二、第三のクラスを通俗的（common）としながら日本の伝統音楽や将来の音楽教育について述べているが、山住正己は目賀田の論を次のように考察している。

第一の音楽はしだいに洗練されてきたが、あまりにも形式に拘泥し荘重さをもとめるあまり、無味乾燥でおもくるしいものになってきてしまい、その結果、この音楽は「一般の大衆の感情には疎遠なものであり、一方、通俗音楽とよぶもののなかに、よりゆたかな表現と精神をみいだす」というのである。また農漁民のうたは、「卑俗」（vulgar）なものかもしれないが、「しかし私は、それらが真の感情の吐露だと考える。古典的音楽と通俗音楽とをませあわせることはできるのだ」といっている。このようなとらえかたは、それまでになかったのではないだろうか。（山住1967：pp.34-35）

雅俗の別を排して日本音楽の改革を行うために西洋音楽を取り込み、公教育における唱歌をそのために位置づけようとした目賀田を評価しながらも、その上申書が、「どれだけ生かされたか、とくに雅俗の区別をやめようという主張がどれだけつらぬかれたかとなると、疑問がでてくる」と山住（1967：pp.44-45）も指摘するように、国楽論の嚆矢となった目賀田や神田孝平等の視点と、その後の唱歌教育、さらには戦後の音楽教育は大きく乖離していくことになる。しかし、農漁民のうた、すなわち、民謡、民俗音楽を「真の感情の吐露」と捉えた目賀田が、古典的な音楽にはない民俗音楽の特質を捉えていたということは、現在の状況から考えれば注目すべきである。

戦後になって、民間教育団体音楽教育の会でわらべうたが教材として取り上げられる。山住は、音楽教育者の自主的な研究と実践の努力としてそのことを評価すると同時に、わらべうたはその地域・その学校の子どもによって異なるものであり、子どもと、教材である音楽そのものを、たえず新鮮な目でとらえる努力をしなければ、その歌はわらべうたではなくなってしまう、と警告する（1966：p.111）。これは、わらべうたが地域によって異なること、一つの楽曲として楽譜に固定されるものではないことを指しており、民俗音楽としての特徴を指摘したものである。

また、戦前の替え歌を例にとりあげ、歌をつくりかえ伝承していく過程にふれて、そこには、子どもたちの音楽的能力を発達させるゆたかな可能性があるとも指摘している（山住1966：p.78）。これも、口頭伝承によって伝播し、伝えられる過程でつくりかえられる民俗音楽のもう一つの特徴の指摘である。

4. 日本へのコダーイの紹介

なじみのあるフシに、その時その場での思いを自在にのせて「替え歌」としてうたうことは生活のなかに息づいてきた民謡の特徴であるが、羽仁協子はコダーイを日本に紹介する最初期にその民謡研究と教育の連携にふれながら、替え歌について次のように述べている。

「かえうた」を楽しみ、高く評価できないものは、その他の遊ぎうたのこともほんとうには分らない。(中略)「かえうた」のかえ方の中に生きているハンガリーの子どもの創造性、精神的特徴をたよりに、コダーイとその弟子たちは、今日、保育園の教材といわれるハンガリーの遊ぎうたの“古典的な”諸型をえらびだしたのである。このプロセスは、保育園の教材篇と民謡大観の「遊ぎうた」集をくらべてみると、どんなにたいへんな仕事であったか、あとをたどっていただけでも頭の下がるようなものである。それは、素材を知りつくしているものだけが、子どもの民族的伝承という神聖な土のかたまりにたいして、教育の名においてふるうことを許されるメスの働きである。(羽仁 1968 : pp.193-194)

約半世紀前に園部三郎らによってコダーイが日本に紹介され、国際音楽教育協会 (ISME) 等を通してハンガリーの音楽教育への関心が高まり、1960年代後半からは長期・短期含めてハンガリーで学んだ日本人を中心にその影響が日本にももたらされるが、本間雅夫によれば、当初、「コダーイ・システムの全貌が知られておらず、ただ、ハンガリーの民族的な音階から教育を出発させ、声による音楽が中心であり、ソルフェージュが重視されるなどということが、断片的にわかっている程度であった。また、コダーイやバルトークには、声のための教育的作品もあって、それがうたわれているなども、知らされていた。コダーイ・システムが本格的に日本に紹介されるのは、羽仁協子氏の帰国後 1967年頃からであった」と言う (1983 : p.90)。先にあげた羽仁の引用では、山住の意味づけた替え歌の捉えは見られないものの、必読の書として柳田國男とともに小泉文夫『日本伝統音楽の研究』(1958)や『音楽芸術』誌における「日本のリズム」の連載 (1962-1963) をあげ、ハンガリーで「すべての知識人の共有の財産となっている」コダーイの音楽史、民俗学、言語学関連の論文に相当するものと位置づけて熟読することが勧められている (羽仁 1968 : pp.200-201)。訳書の解説として、『ハンガリー民謡大観』をはじめとする民俗音楽研究と深く連携したハンガリーの教育のあり方から学び、日本での研究の蓄積と教育関係者による理解の必要性が述べられているのである。1969年に出版されたコダーイ芸術教育研究所編『こどもの集団・遊び・音楽』でも、『ハンガリー民謡大観』の第1巻 (遊戯歌) を引用してハンガリーから学ぶ姿勢を示すと同時に、小泉の『日本伝統音楽の研究』や小泉が監修した日本のわらべうたに関する書籍が参考文献として提示されており、ハンガリーを参考にしながらも、日本の民俗音楽研究と教育との接点が真摯に模索されていたことが読み取れる (コダーイ芸術教育研究所 1969 : p.2, pp.12-24)。

しかし、ハンガリーの音楽教育の卓越性を見聞した日本人が増えるにつれ、1962年に「ハンガリーの音楽教育については、まだほとんど知られていないが、参考になる点がすくなくない」(園部 1962 : p.197) と言っていた園部をして、「残念なことに、日本の音楽教育界には、まだまだ外国模倣の悪習慣が強く残っている (中略) オルフ・システムやコダーイ・システムは、われわれにとって、『他山の石』とはなっても、そのままわれわれ自身のものであることはできない」(園部 1970 : p.61) と言わしめる状況が目立つようになる。1981年には札幌で第5回国際コダーイ・シンポジウムが開催されて400名の日本人参加者が集い、翌1982年には、コダーイ・ゾルターン生誕100年記念講座が東京で開催され、その副題には「コダーイの音楽教育の思想とその実際」というタイトルがつけられた。そこには、メソッドやシステムの安易な模倣に陥るのではなく、コダーイの思想を理解し、その理念に共感しよう、という主旨が当時の日本コダーイ協会会長の谷本一之によって述べられているが (谷本 1982)、しかし、デモンストレーションで行われたのはソルフェージュの公開授業で、「コダー

イ・システムによる音楽が確実に身につく活動」という題目であった。

第5回国際コダーイ・シンポジウムの総括として、谷本は、「いわゆるコダーイ・システムとか、コダーイ・メソッドとか言われて普及している音楽教育の体系が、単に音楽教育上の抽象的な方法論としてあるのではなく、一民族の歴史と課題に深くかかわったものであることが明らかになるのである。このためにシステムとかメソッドという限定された内容の言葉を使うことは必ずしも適当ではない」(1981.10:p.55)と述べている。また、パネル・ディスカッションではセシリア・ヴァイダが、「アメリカで経験した失敗の一つは、ハンガリーのコダーイ・メソッドの表面的なものだけを取入れ、できあがったものはむしろコダーイの哲学・主張からは反対のものだったということです。そこからは、全人的な発達、人間的な発達ということではなくて、テクニシャンというものができ上がったという失敗がありました。そこで私は、今後の問題として、私たちはこれからハンガリーの模倣・反復を繰返す必要があるだろうかということを考えます。(中略)コダーイの哲学を中心に、高度に知的な水準に高めるための努力をしたい」(1981.10:p.53)とアメリカの事例にふれながら述べている。

こうした反省がなされた原因は、コダーイの理念において、わらべうたのようなそれぞれの民俗音楽から芸術音楽へ向かう音楽教育がどのように位置づいていたのかが十分に理解されていなかったことにある。くわえて、民俗音楽研究の振興が音楽教育の前提としてあり、ハンガリーでは組織的・継続的に研究が蓄積されている、という、最初期に羽仁が指摘していたような認識が、時代を経るにつれて薄くなっていったことももう一つの原因であろう。この状況は、近年のコダーイ・コンセプトへの注目のなかでもそれほど変わってはいない。そこで、次章では、現在のハンガリーにおける民俗音楽研究の状況についてハンガリーからの報告を行う。

5. ハンガリーにおける民俗音楽研究

ハンガリーにおける主要な音楽研究所として、ハンガリー科学アカデミー人文科学センター音楽学研究所(MTA BTK Zenetudományi Intézet)をあげることができる。2013年夏の組織変更によって人文科学研究センター(BTK)の管轄下に位置づけられており、その組織は図1の通りである。

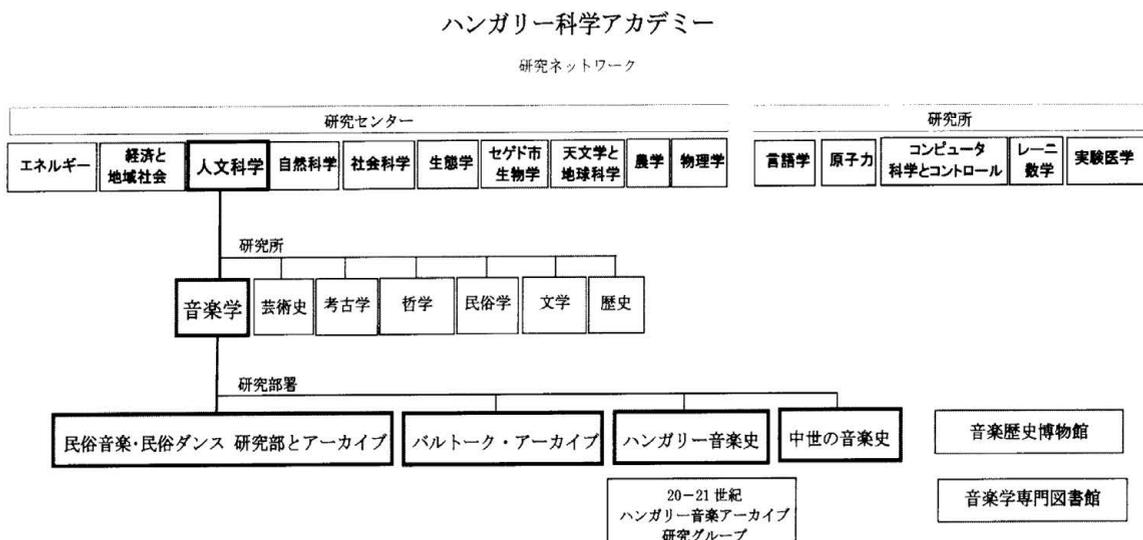


図1 ハンガリー科学アカデミー人文科学研究センター音楽学研究所の位置づけ

バルトークとコダーイが民謡蒐集に着手するのは20世紀初頭からだが、ハンガリー科学アカデミーには1933年に民俗音楽専門委員会が設立され、ハンガリー民俗音楽の編集と出版、民俗音楽の採集・研究と指導がコダーイやバルトークに託された。1943年にはコダーイはハンガリー科学アカデミーの客員会員となり、1946年から1949年までハンガリー科学アカデミー会長に就任する。1953年にはハンガリー科学アカデミーの民俗音楽研究部署が設立され、1958年にバルトークの息子、Ifj. バルトークがバルトーク遺品をハンガリー科学アカデミーに寄贈、1961年にバルトーク・アーカイブ設立（主任 ショムファイ・ラースロー）、1965年に民俗舞踊研究部署設立（主任 マルティン・ジュルジ）、1969年バルトーク・アーカイブを音楽学研究所と名称変更（所長 サボルチ・ベンツェ）、1973-1980年に音楽学研究所と民俗音楽研究グループが合体、1984年に音楽学研究所の建物が完成し、翌1985年に開所、2012年にはリヒテル・パール（リスト・フェレンツ音楽芸術大学民俗音楽学科主任）が所長となって現在に至る。

一方、コダーイとバルトークが教えていたリスト・フェレンツ音楽芸術大学ではコダーイとその弟子たちによって1949年に民俗音楽研究グループが結成され、1951年には音楽学学科設立となり、コダーイらによって民俗音楽が講ぜられる。コダーイの死後、1967年からライェツキー・ベンジャミンが主任となって民俗音楽研究グループは継続されるが、1973-1980年の間に科学アカデミーの音楽学研究所と合体する。

次に、ハンガリー科学アカデミーの音楽学研究所の研究内容概要と、主要な出版物・オンライン・データベースについて示す。

（1）民俗音楽研究

民俗音楽学研究，ハンガリー民俗音楽大観（ハンガリー民俗音楽討論集）

バルトーク分類システムとコダーイ分類システム，編集，出版，その他民俗音楽採集の整理・分類，出版。民俗楽器，民俗器楽曲の分類，出版，民俗音楽史と比較研究（フィンウゴル族・トルコ・アフリカ・南アフリカ・オセアニア・アジア諸国の民俗音楽，近隣の民俗音楽，歴史的源泉）わらべ遊び，民俗習慣の歌と器楽音楽研究，分類整理，出版，「ヨーロッパスタイルのメロディー・カタログ」専門図書収集，音源集出版，音楽文化人類学研究

（2）民俗音楽アーカイブ

ハンガリー，少数民族，近隣民族，フィンウゴル族，トルコと世界の民俗音楽と民俗舞踊（ドキュメント，レコード・CD・録音テープ・フィルム・ビデオ，写真などの収集物），保存，収集，カタログ化，デジタル化，その他オンライン，CD，DVD 編集

音源：約18,000時間（内約4,500本 蝋管蓄音機シリンダー約200-250時間分 19世紀末から1950年代まで）ハンガリー民俗博物館保管，現時点でおよそ70%デジタル化）

（3）民俗舞踊研究

民俗舞踊学研究と出版，民俗舞踊史の研究，舞踊スタイル，比較分析研究，モチーフ分類，キネトグラフィとその分析，民俗舞踊の民俗学・文化人類学的研究

(4) 民俗舞踊アーカイブ

映像集：16mm フィルム：約 240,000 m - 約 750 時間（無声 125,000m -465 時間，音声 115,000m - 275 時間），8mm フィルム：10,000m，ダンス音楽：約 10,000 曲，舞踊写真：約 50,000 枚，記録集：約 1,700 件，キネトグラフィ集，モチーフ集

(5) 民俗音楽研究出版物

『ハンガリー民俗音楽大観』

I. Gyermekjátékok (1951) Szerk.: Kerényi György Magyar Tudomány Akadémia (わらべ遊び)

II. Jeles napok (1953) Szerk.: Kerényi György Magyar Tudomány Akadémia (祭礼)

III. A-B. Lakodalom (1955-56) Szerk.: Kiss Lajos Magyar Tudomány Akadémia (婚礼)

IV. Párosítók (1959) Szerk.: Kerényi György Magyar Tudomány Akadémia (求愛)

V. Siratók (1966) Szerk.: Kiss Lajos és Rajeczky Benjamin Magyar Tudomány Akadémia (哀悼歌)

VI. Népdaltípusok 1. (1973) Szerk.: Járdányi Pál és Olsvai Imre Magyar Tudomány Akadémia (民俗音楽分類)

VII. Népdaltípusok 2. (1987) Szerk.: Olsvai Imre (Járdányi Pál rendszerében) Magyar Tudomány Akadémia (民俗音楽分類)

VIII. A-B. Népdaltípusok 3. (1992) Szerk.: Vargyas Lajos (Főmunkatársak: Domokos Mária és Paksa Katalin) Magyar Tudomány Akadémia (民俗音楽分類)

IX. Népdaltípusok 4. (1995) Szerk.: Domokos Mária Ballasi Kiadó (民俗音楽分類)

X. Népdaltípusok 5. (1997) Szerk.: Paksa Katalin Ballasi Kiadó (民俗音楽分類)

XI. Népdaltípusok 6. (2011) Szerk.: Domokos Mária Ballasi Kiadó (民俗音楽分類)

XII. Népdaltípusok 7. (2011) Szerk.: Paksa Katalin Ballasi Kiadó (民俗音楽分類)

Magyar Népzenei Antológia. Anthology of Hungarian Folk Music. Complete Digital Edition (2012) fő szerk./ eds: Richter Pál (ハンガリー民俗音楽のアンソロジー)

(6) 民俗舞踊研究出版物

Felföldi László — Pesovár Ernő szerk. (1997) A magyar nép és nemzetiségeinek tánc hagyománya. Második, javított kiadás. Budapest: Planétás. (ハンガリー民族と少数民族の伝統的な舞踊)

Fügedi János — Vavrincez András szerk./eds. (2013) Régi magyar táncstílus – Az ugrós. Antológia. Old Hungarian Dance Style—The Ugrós. Anthology. Budapest: L'Harmattan—MTA Bölcsészettudományi Kutatóközpont Zenetudományi Intézet. (古いハンガリー舞踊スタイル—ウグローシュ)

Fügedi János (2011) Tánc — Jel — Írás. A néptáncok lejegyzése Lábán-kinetográfiával. Szóló- és körformák. Függelékkel. Budapest: L'Harmattan — MTA Zenetudományi Intézet. (舞踊—サイン—記譜。ラバ舞踊記譜法をもとに。ソロとサークル・フォーム)

Karácsony Zoltán szerk (2004) Magyar táncfolklorisztikai szöveggyűjtemény. 1. kötet. Budapest: Gondolat Kiadó—Európai Folklór Intézet. (ハンガリー舞踊民俗学用語集)

Lányi Ágoston — Martin György — Pesovár Ernő (1983) A körverbunk története, típusai és rokonsága. Budapest: Zeneműkiadó. (サークル・ベルブングの歴史・分類・関連のある舞踊)

Martin György (1964) Motívumkutatás, motívumrendszerezés. A sárközi–Duna menti táncok motívumkincse. Budapest: Népművelési Intézet. (モチーフ研究・分類・整理・システム化, シャールクジとドナウ川沿岸地方のダンスとモチーフの宝)

Martin György (2004) Mátyás István „Mundruc”. Egy kalotaszegi táncos egyéniség vizsgálata. Szerkesztette Felföldi László – Karácsony Zoltán. Budapest: MTA Zenetudományi Intézet – Planétás. (マーチャーシュ・イシュトヴァーン「ムンドゥルツ」)

Martin György (1970–1972) Magyar tánc típusok és táncdialektusok. I–III. melléklettel. S.l. Budapest: Népművelési Propaganda Iroda, s.a. (ハンガリー舞踊分類と各地方の特性)

Pesovár Ernő (1986) A magyar páros táncok történeti rétegei. Szombathely: Megyei Ifjúsági és Művelődési Központ. (ハンガリー・カップル舞踊の歴史)

(7) オンラインデータベース

① コダーイ分類システム

コダーイ・ゾルターンは、民俗音楽採集と歴史的なオリジナル作品による自筆メロディー譜集。コダーイ分類システムには、30,000以上の旋律数が集められている。コダーイの採集のもの、彼の弟子によって採集された民俗音楽。その他に18世紀から19世紀に出版された音楽作品。記録用紙にはコダーイの自筆がある。

② 民俗音楽の出版図書にある音源

6,000曲の音楽、音質(128kbps, 41kHz, mono mp3)、最初の歌詞、アーカイブ番号、曲種、詳細、楽器、場所、件、採集時期、採集者名、演奏者、誕生日、著書名、出版場所と時期、編集者、出版社、出版番号、録音番号

③ 民俗舞踊オンライン・データベース

民俗舞踊アーカイブ255件の16mmとその他の映像を含むハンガリー民俗舞踊の分類、各地方の特色ある舞踊、舞踊の全部が映像に収められている。

④ 民俗音楽と民俗舞踊の写真オンライン・データベース

5,000件の民俗音楽と民俗ダンス、それらの民俗学的分類、1950年から1989年までの採集データベースの内容項目：連番号、採集場所、時期、採集者名、写真の記録、舞踊種類、ネガの長さ

⑤ 民俗音楽出版物とオリジナルの民俗音楽の音源 オンライン・データベース

309件のオリジナル民俗音楽録音

内容項目：著者名、編集者、出版場所、出版時期、出版社、その他音楽タイプ、曲数、シリーズ名

6. コダーイの音楽教育理念における民俗音楽の意義と必要性

コダーイ・ゾルターンは、ハンガリーの文化建設の基盤であり、完全なる人間の形成の基礎になる音楽教材は、自国の民俗音楽であると提言している。

1951年、コダーイはハンガリー民俗音楽の採集の集大成として『ハンガリー民俗音楽大観』第1巻「わ

らべ遊び」を出版した。その序文に子どもの遊びの意義について「わらべ遊びによって民俗音楽にある古代の様相をより奥深く見極めることができる。(遊びは)動きと構想と簡単な歌がひとつにまとまり、原始的であり、そして複雑な現象である」と述べている(Kodály 1964a : p.190)。また、わらべ遊びの特性について、「大人の音楽生活の中で消えてしまった純真で、自由な原始的な遊びである。大人たちは、いつも堅苦しい形式や型にはめ込もうとする。(遊びは)小さなバラトン湖の貝殻のように、モチーフがまとまって張り付き、いつも変化し、まるで夢の中で2人か多くの人が一度に現れるかのように、メロディーの原子が一つになったり、離れたりする。民俗文学の永遠の謎：すべてが散り散りになったものや異なる要素がひとつにかたまっているものが集まっている。また、つねに燃えたぎる高炉の中で一度に新しくなったり、あるいは古いものが消えたりする。—しかし、その中には不朽なものに残り、新たに生まれ変わる」(Kodály 1964a : p.190)。続いて、遊びはその国自身の特徴と豊かな人間性として共通感情や生きる喜びを高め、この原始的な遊びが国や文化の発展に寄与することを主張する。

次に民謡の価値は「民謡は、諺のように簡単に作ることはできない、数世紀の人々の知恵や教えが漉され、歌の伝統として数世紀の感情が精錬され磨かれた形で永遠に生きている。できるだけ多くの若者の心に与えれば、祖国とよりよい関係をもつことができる。どんな大傑作もこの伝統の役割を補うことはできない」(Kodály 1964a : p.109)。つまり民謡は人間の心の宝庫である。

わらべ遊びや民謡の価値を生かすためには、ふたたび原点に戻り、これらは単なる昔の遊びや歌としてでなく、生活の一部であるように、遊び、歌う必要性を感じさせなければならない。コダーイは、自分の目と耳で確かめ、ともに村人と生活することを奨励する。

「学者のように参考文献を収集するように『理解する』のは十分ではない。それは、たぶん外国のものとなる。伝統というものは人とともに生活し、人間的な関係を保つことである。生きたものと生きたものとのが、目と目が会わなければならない。日に日に機械を使うことが多くなっている。生きた作品や民謡の雰囲気は機械では感じられない」(Kodály 1964b : p.232)。

コダーイの音楽教育理念は、ハンガリー音楽文化の発展のために、そしてハンガリー人がよりハンガリー人らしく、人間がより人間らしく成長するために、自国の民俗芸術を基盤にした哲学である。

7. 考察

民俗音楽の位置づけの大きさは、歴史的な経緯からも現在の組織や研究成果を見ても、ハンガリーの音楽学、音楽教育体制のなかで際立った特徴となっている。近年はとくに、アーカイブの蓄積とともにオンライン資料や出版物での公開と発信に力が入られていることがわかる。コダーイは、「理論は時代遅れになってしまうことがあるが、十分に吟味して出版された資料は決してそうはならない」と『ハンガリー民謡大観』の第2巻(1953)の序文に書いているという(Eösze 1994 : p.502)が、政治体制の変動もふくめて決して平坦な道のりではなかったにもかかわらず、コダーイやバルトークを中心として形作られてきた民俗文化尊重の姿勢が現在もしっかりと根づいている。

しかしながら、今、日本の学校教育で我が国の伝統文化の尊重が課題とされる根拠は中教審答申で示された「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成」である。第二次世界大戦前のハンガリーと比べて状況は異なるとしても、コダーイが唱えた民俗の重視が日本と決定的に違うのは、「民族〔俗

音楽は原始的な音楽ではない。千年に亘って発展、成熟してきた芸術である・・・したがって、この音楽は我々の民族精神の最も完全な音楽的表現なのである。民族〔俗〕音楽は、ただ農民階級のための音楽文化であるだけでは、その役割を十分に果たしているとは言えない。それは我々全てにとってもまだ重要な意味をもっている。なぜならば、その音楽は、真に国民的な音楽文化の芽生えを内包しており、それを発育させ、実を結ぶようにするのが教養階級の責任なのである」(エウセ 1974 : p.67) というコダーイの論文にあるような視座の欠如である。

歌舞伎、能、雅楽のように、「国際社会に」誇る芸術としての「伝統音楽の理解」という外的な理由づけは、子どもたちの内側に自文化を形成する根拠とはならない。国楽創成を掲げて西洋音楽を移入して唱歌教育を展開し、敗戦によって西洋音楽による戦後の音楽教育が整備されるなかで、日本では打ち捨てられてきたもの、すなわち、民俗への着目が実はハンガリーの音楽教育の原点にある。たとえば、戦後の音楽教育を反省し、小泉理論を参照しながらわらべうたからの音楽教育を構想した1960年代の状況に立ち返ってみることも史的な考察としては有益であろう。園部は、1963年に次のように語っている。

伝統を、古来からの歴史的民族伝統と、外来の影響の同化物で今日または未来の日本人にとって、創造的エネルギーとなりうる質との2つの面で捉える必要があると考えるからである。この2つの面の統一的把握に立つたとき、私たちは、はじめて、正しく、バルトークやコダーイの創造過程と教育原理を理解することができるのであり、しかも、それはそのまま日本に適用されうるものではない、というきびしい見解によつて、明らかに学びうるものを食欲に摂取することが必要なのである。(園部 1963 : p.37)

日本の音楽は純粹固有なものでできているわけではなく、外来の音楽を受け入れ、同化し、融和によって展開されてきた。また、明治期以降は国楽創成の名のもとに西洋音楽が公的に導入され、在来の音楽の一部は湮滅に瀕してきた。そうした状況をふまえながら、「創造的エネルギー」ということばで園部が述べているように、日本の音楽文化の状況を教育と結びつけ、次代のために模索した1960年代にハンガリーから得た示唆は非常に大きなものがあったと言えよう。

8. おわりに

日本では、主としてハンガリーの音楽教育の方法論に注目がされてきた。しかし、ハンガリー民俗音楽研究についてハンガリーでの現在の状況を知ることにより、現在に至るまでの蓄積と研究の厚み、さらには未来に向けた取り組みに圧倒される。コダーイらによって1951年に着手された『ハンガリー民俗音楽大観』の仕事が、2011年に第12巻を発行して継続されていることもその一つのあらわれであろう。日本でも、戦前に町田佳聲や藤井清水らによって着手されたNHKの『日本民謡大観』が、約半世紀かけて戦後まで受け継がれ、小泉を中心とする東京藝術大学民族音楽ゼミナールによって発刊されてきたが、その膨大な労力と集成がどこまで活用されてきているかを考えたとき、あらためてハンガリーにおける民俗音楽研究と音楽教育との関係から学ぶべきものの大きさが感じられる。

注

- ¹ 大正期には童謡運動，昭和戦前期には郷土教育の潮流のなかで，わらべうたに注目がなされたが，いずれも子どもの中に伝承されている自然なわらべうたが楽曲として加工されたものだった。詳しくは，(権藤 2005) 参照。
- ² ハンガリー科学アカデミーの資料をもとに高橋が作図。
- ³ 岩井 (1992) におけるフォーライ・カタリンとの対話，シャーロシ (1994) による生きた民俗音楽への鋭い視点，横井 (2005) にみられる，ダンスハウス運動を通じたハンガリーの現代文化の状況などからも，ハンガリーにおける民俗音楽文化の位置の大きさに気づかされる。

引用・参考文献，参考 URL

- 岩井正浩 1992 『ハンガリーの音楽教育と日本 — フォライ・カタリンとの対話より』音楽之友社。
- エウセ・ラースロー (Eősze, László,) 1994 「コダーイ・ゾルターン」 谷本一之・横井雅子訳，『ニューグローヴ世界音楽大事典』第6巻，講談社，pp.498-503 (原著 1980)。
- エウセ・ラースロー 1974 『コダーイ・ゾルターン — 生涯と作品』 谷本一之訳，全音楽譜出版社 (原著 1962)。
- コダーイ・ゾルターン 1971 『ハンガリーの民俗音楽』 関鼎訳，音楽之友社，(原著 1960)。
- コダーイ芸術教育研究所 1969 『こどもの集団・遊び・音楽』 明治図書。
- コダーイ芸術教育研究所 1975 『保育園・幼稚園の音楽 — わらべうたの指導 —』 明治図書。
- 「コダーイ・ムーブメントの現在および将来」1981.10 (パネル・ディスカッション) 『教育音楽 小学版』 pp.50-53。
- 権藤敦子 2005 「唱歌教育におけるわらべうた曲集の意味 — 教材化への視点を中心に —」 『音楽表現学』 vol.3, pp.1-20。
- シャーロシ・バーリント 1994 『ハンガリーの音楽 — その伝統と語法 —』 横井雅子訳，音楽之友社 (原著 1975)。
- 園部三郎 1962 『日本の子どもの歌 — 歴史と展望 —』 岩波書店。
- 園部三郎 1963 「ゾルタン・コダイ — 生誕 80 年によせて —」 『音楽芸術』 vol.21, no.4, pp.32-37。
- 園部三郎 1970 『幼児と音楽』 中央公論社。
- 谷本一之 1981.10 「第5回国際コダーイ・シンポジウムを振り返って」 『教育音楽 小学版』 pp.54-57。
- 谷本一之 1982 「現代的課題に答えるコダーイの活動」 『コダーイ・ゾルターン生誕 100 年記念講座 — コダーイの音楽教育の思想とその実際 —』 配布講演資料。
- 塚原康子 2009 『明治国家と雅楽 — 伝統の近代化／国楽の創成』 有志舎。
- 羽仁協子 1968 「訳者解説」 フォライ・カタリン他 『ハンガリー子どもの遊びと音楽』 羽仁協子訳，明治図書。
- 本間雅夫 1983 「わらべうたを素材とする音楽教材 — 幼児から小学生へ —」 本間雅夫・鈴木敏朗 『遊びと合唱・幼児から小学生へ わらべうたによる音楽教育』 自由現代社，pp.86-92。
- 文部科学省 2008a 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社。
- 文部科学省 2008b 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社。
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領解説 芸術編』 教育出版。
- 山住正己 1967 『唱歌教育成立過程の研究』 東京大学出版会。
- 横井雅子 2005 『伝統芸能復興』 アーツアンドクラフツ。
- Eősze László 2007 *Kodály élet kronikája*. Editio Musica. (コダーイの生涯史)
- Kodály Zoltán 1964a *Visszatekintés I*. Zeneműkiadó. (回顧録)

Kodály Zoltán 1964b *Visszatekintés II. Zeneműkiadó.* (回顧録)

Kodály Zoltán 1989 *Visszatekintés III. Zeneműkiadó.* (回顧録)

Kodály Zoltán 2008 *Visszatekintés III. Argumentum.* (回顧録)

Szalai Olga 2004 *Kodály, A népzene kutató és tudományos műhelye*, Akadémiai Kiadó. (コダーイ, 民俗音楽研究と科学的ワークショップ)

<http://www.zti.hu/ztitt.htm> (Tallán Tibor (アップロード年なし) A Magyar Tudományos Akadémia, BTK. – Zenetudományi Intézetének rövid története 2013. 10. 27 アクセス), (ハンガリー科学アカデミー BTK. 音楽学研究所小史)

http://en.lfze.hu/about_liszt_academy/history/_significant_eras/the_last_50_years (リスト・フェレンツ音楽芸術大学ウェブサイトより 2013.10.30 アクセス)

<http://db.zti.hu/> (ハンガリー科学アカデミーウェブサイトより 2013.10.27 アクセス)

附記

本稿作成にあたって、ハンガリー科学アカデミー人文科学センター音楽学研究所の所長リヒテル・パール (Richter Pál) 氏より掲載許可および資料提供、ドモコシュ・マーリア (Domokos Mária) 氏より資料提供をいただきました。心より感謝申し上げます。

また、本研究は JSPS 科研費 22530981 の助成を受けたものです。